「パパラッチ（双葉社）」
2007年1月号～2007年5月号

『ＫＡＺＵＫＩの大阪お笑いタクシー乗務報告』
バックナンバー

2007年5月号

異色のドライバー

こんな KAZUKIの 大阪 お笑いタクシー「乗務報告」

ケッタイな人がいてまんねん

第5話◎「タマラン」

オッス。大阪のタクシー会社勤務の新人運転手・カズや。よろしゅう頼むで。しかし、ワシが出版社の編集長の紹介でタクシーに乗務してもう半年。品行方正に業務を遂行する毎日や。ところが、そんなワシも、ついに落とし穴にハマってしもうたんや。それも自業自得の……。

一人の婆さんが

その日、ワシは深夜料金で神戸まで一人乗せて、帰りの大阪行きでも大阪市内までっちゅうて、一人の御婆ちゃんを乗せたんや。ホンマに往復ビンタで売り上げがあがり、ワシは上機嫌やった。その上客の御婆ちゃんは服装からしてマッサージ師や。深夜の業務が終わっての帰りやろう。客の御婆ちゃんも、

「兄ちゃん、機嫌好さそうやな。私も上機嫌なんよ」

と調子を合わせてきよった。ワシは、

「そうでっか……どんな事がおましたんや?」

と聞いたんや。そうしたら、

「兄ちゃんは関西の人間やから野球は阪神ファンなんやろ。ところが私は巨人ファンなんよ」

と運転席に寄りかかりながら話し出したんや。ワシは、

「ワシ、野球はようわかりまへんねや。ほんでも確かに今日のオープン戦では巨人が勝ってましたな。ファンにとっては掛け替えの無い日でっしゃろな」

と、下手な相槌をうったんや。それがドッボの始まりや。御婆ちゃんはワシの言葉を聞くなりテンポアップじゃ。

「兄ちゃん。ワテの信条は、好い事は分かち合えや。そやから、精一杯、分かちおうたるわ」

伝説のマッサージ師三井やで

丁度、車が43号線っちゅうて"阪神高速道路の下を通りながら淀川を横断して走ってる"大きな幹線道路に出たときや。

「あんさん等は、ワテのカッコウ見て何の仕事してるか判断できるやろ」

と、ワシの肩をモミながらニヤニヤと耳元で話よる。

「へえ、マッサージ師さんでっしゃろ」

と、返事をすると、

「正解や。そこでや、あんたらみたいな職業の人間は腰がコッテルはずや。ちょっとそこの路肩に止めてみい」

っちゅうて左手で左舷の路肩を何度も指しよるんや。ワシは言われるままに車を路肩に止めたんや。深夜のこと。歩道に全く人通りがアラヘン。御婆ちゃんは、

「ワテ、伝説のマッサージ師って呼ばれる三井っちゅうねん。三井財閥の三井やで。さあ、早よう後ろで横になってみいや。腰をサッパリさせたるから」

っちゅうてワシに後部席に来るように促しよる。ワシは、

「業務中やからアキマヘン」

と再三断ったんやけど、三井の御婆ちゃんの強い押しとワシの腰の弱さで押し切られてしもうた。実際、ワシも腰が重うて困っとったんや。

KAZUKIプロフィール

ゴッドプロデューサーとして様々なメディアに登場中の謎の大阪人。市井の様々な人間を観察するかたわら、特殊な能力を使った歴史小説も展開。昭和評論家でもある。著書に『平将門首塚の謎』(ジーオー企画)等がある。

構成/溝上英範

だが、ワシかて抜け目は無いで。盗人やったらアカンさかい、売り上げは、サッと運転席のシートの下に隠したんや。そして後部席にうつ伏せになって「スンマヘンなあ」と目を閉じた。

「実はワシ、座りっぱなしで腰の辺りが硬うなってまんねん」

ワシは御婆ちゃんに訴えかけた。そしたら御婆ちゃんは、

「♪かっ飛ばせ――ニオカ。頑張れ頑張れ原ちゃん、ダー!!」

と猪木の顔真似をして訳の分からん唄を耳元で歌い、自分の顔を最大限に近付けよった。ホンデ、上機嫌でこう言ったんや!

「あんた、今日はハッピーやで。スペシャルコースや! 今すぐ。仰向けになりや」

っちゅうてケツを叩きよる。

結局、お決まりのコースに……

ワシは「足三里(向こう脛の横辺り)でも押してくれるんか」と、ウキウキして仰向けになったんやが、婆は、

「三本目の足は、みんな気持ちエエんや。それよりあんた、ちょっと目を瞑っててや」

ちゅうて横向きヨルんや。観るなと言われたら観たくなるのはこの世の常や。ワシはその婆の顔をチラッと横目で観たんや。そうしたら右手で入れ歯をズボッと抜きよった。ワシはビックリしたで。何でマッサージするのに入れ歯抜くんや??

ところが婆は、ワシの事など意に介さず、無造作にワシのズボンのチャックに手かけ、オモムロに、ワシのモノを掴み出しパックシ!

三井の婆のテクニックは戦後数十年の年季が入っててミミズ千匹状態や。ジュバジュバとリズミカルなテンポにワシは職業と人生を瞬間的に捨てたで。やがてワシが「ホエー」と昇天したのを確認すると婆は用意していたペットボトルのお茶でクチュクチュっとウガイをしたんや。そして、

「兄ちゃんもオボコイなあ」

っちゅうて後部席に座りなおしよった。ワシはズボンをあげながら運転席に移動すると、しばらく呆然や。

結局…ワシはメーターを上げたままの走行や。コソバユイ股間が営業という行為を許さんかったんや。目的地に着くと、三井の御婆は、手を振って降りていきよった。

ワシ、乗車賃をヨウ請求センかったわ。オマケに後日、分かったんやけど……道路の監視カメラにすべての行為が録画されとったわい。

2007年4月号

異色のドライバー KAZUKIの 大阪 お笑いタクシー「乗務報告」

こんなケッタイな人がいてまんねん

第4話◎「大損やで」

オッス。大阪のタクシー会社勤務の新人運転手「カズ」や。よろしゅうにナ。

さて、最近タクシーの運転手による「泥酔した客の懐から財布や金品を奪ったり、最終電車に乗り遅れた女性客専門の強姦事件」がおきとるらしいワ。会社の部長の訓示で聞いたけど、ホンマに同業者として嘆かわしいノウ。せやけど、ワシの場合は金品を奪われてばっかりで、反対に訴えたいくらいや。今日もそんな「損した話」を聞かせたる。

※

その日、一発目の客は恵比須町で乗せた20歳過ぎの女のコやった。そのコはドアが開くなり、

「5000円しかないんですが……。神戸の三宮まで行けますか?」

口ではそう聞きながらも本人はチャッカリ後部席に深々と座り、ワシに「行け」と言わんばかりの態度や。ワシは、(何とか端数オーバーで行けるヤロ。それに若い姉ちゃんやし、多少の金銭はかぶったろか)

と思って車を走らせたンヤ。道中、ワシは若い女のコと2人だけの空間と会話を楽しみながら高速道路を走らせたんやが、現地に着き、とんでもない間違いをしでかしていた事に気づいたんや。その間違いっちゅうのは高速代金や。

「ハイ。5000円」

金銭を差し出す姉ちゃんを見ながらワシは血の気が引いたで……。

泣きっ面に婆が刺す

姉ちゃん降ろして気落ちしてたら、誰かが窓ガラスをノックしよる。ワシが低い声で

「ヘーイ」

とドアを開けると、今度は大きな風呂敷包みを担いだ高齢者の女性客や。ワシは神戸市内は分からんし、ドナイしょうと戸惑ったで。ところが、

「すんませんけど大阪市内まで行けまっか?」

そのお婆ちゃんは申し訳なさそうに尋ねるんや。ワシは帰りの高速代金をどうやって捻出しようかと思案していた最中やったんで、

「ヘイ! 喜んで行かせて頂きます」

と100点の笑顔を返したんや。ところがそのお婆ちゃんが言葉を続けよるンヤ。

「1万円は風呂敷包みの底の財布に有ると思うんですけど、大丈夫でっしゃろか?」

ワシは、

(高速代金入れても若干お釣が来るで、捨てる神あれば拾う神や)

と喜び勇んで出発進行や。道中、お婆ちゃんの線香臭いニオイと行商で舞鶴から出てきた話、ホンデ全く両親の面倒を看ない息子の話をエエシコ聞かされたんやが、そのうちにお婆さんは眠り込んでしまいよった。ワシはお婆さんの無駄口から開放されたと内心、ホッとしながら大阪市内の指定場所まで送ったんや。

婆、おまえもか?

「お客さん、着きましたで。8600円と高速代金が1200円で合計9800円。なんとか足りましたで」

しかし、なかなかお婆ちゃんは起きてくれへん。何べん声をかけてもアカンさかいに運転席を出て、後部席のドアーを開けて肩を揺すって起こしたんや。ところがそれでも起きヘンノヤ。

(このお婆さん、老衰で逝ってまいよったんとちゃうやろか、そうなると移動中の死亡の場合、死亡場所は何処になるんや?)

イラン心配をしながらお婆さんの手の脈を看たり、心臓に耳を当てたりしてたんや。そうすると通行人が段々こっちに注目してきよる。

ワシは〝困ったモンや〟と途方にくれ、通行人に愛想笑いしながら婆さんの肩を何度も何度も揺すったんや。

と、そのときや。突然、お婆ちゃんが目を覚まして、

「ビヤー」

と入れ歯が飛びそうな悲鳴をあげよった。そして、

「痴漢じゃ! 痴漢」

と騒ぎ出しよった。ワシは、

「ちょっと、待ってエナ。お婆ちゃんが…」

説明しても悲鳴をあげるのを止めへんのや。あげくに、

「財布が無い」

ちゅうて、騒ぎ方を変更しよった。ワシは(もしかして、この婆さん、計画的?)と気づいたが、後の祭りや。野次馬が多くなって来て、ワシはだんだん悪人視線で見られていることに気づいたで。

そして、ワシの脳裏には、「泥酔した客の懐から財布や金品を奪ったり……」という部長の訓示が脳裏を過ぎったで。案の定、野次馬からは、

「何したんじゃ」とか「この悪人」っちゅう罵声が飛び出したんや。

婆も一瞬の隙をついて野次馬の後ろに隠れ、

「オー、怖かった怖かった」

ワシは怒ってエエんか叫んだらエエんか、ワカランようになったで。そうこうすると、やってきたんは警官や。

「ちょっと話を聞かせてんか」

っちゅうてワシの手を捻ったがな。そして、

「被害者は?」

と野次馬に聞くと、

「あれ、さっきまでココにいてはったんやけどね」

全員キョロキョロしよった。クッソー婆、おらへんがな。野次馬もその状態を察知し、蜘蛛の子を散らすように消えて行ったんや。後に残ったワシと警官は一瞬、沈黙や。

「クッソー、人を悪人呼ばわりしやがって…」

ワシは、警官から、

「人生色々あるで…」

と肩をたたかれ優しく励まされたわ。

KAZUKIプロフィール

ゴッドプロデューサーとして様々なメデイアに登場中の謎の大阪人。市井の様々な人間を観察するかたわら、特殊な能力を使った歴史小説も展開。昭和評論家でもある。著書に『平将門首塚の謎』(ジーオー企画)等がある。

構成/溝上英範

2007年3月号

異色のドライバー

こんなKAZUKIの大阪お笑いタクシー「乗務報告」

ケッタイな人がいてまんねん

第3話◎栗粉根軽石

オッス。大阪にある㈱BTHタクシーの新人運転手・カズや。餅食って正月やと思っていたら、早くもバレンタインデーがやって来よる。今日はワシが去年のバレンタインデーに体験した、とんでもない話を聞かせたるわ。

※

その日、ワシは陽気に口笛を吹いて、堺筋でタクシーを転がしてたんや。丁度、長堀通りを越えたあたりやろか…、旧型のリンカーンのリムジンがワシのタクシーの横にピタッとついて走ってる事に気づいたんや。

乗用車2台分はある長い車や。ワシはどんな奴が乗っとるんかなと、真っ黒なスモーク張りの窓をチラッと見たんや。するとウインドウがビューと開き、車内のVIPが顔を出しよった。VIPは頭の毛が脳天から河童状態で逆げ上がり、シワクチャな顔で薄笑いを浮かべた田舎臭いオッサンや。河童は、なんとワシに手を振って、止まれと合図しとる。何事かと、ワシは慌てて車を止めたんや。

リムジンはワシの横に停車すると河童はさらにワシの車を指差しよった。ワシは「こっちに移りたいんかな」と思い、降車してリムジンの後部席ドアーの前に立った瞬間や。河童がリムジンから凄い勢いで飛び出して来てゲロを吐きよった。それも一発芸のように激しく、直立状態でワシに向かって放水開始や。

一瞬、ワシもひるんだで。しかし、ワシは元ボクサーや。通信教育やけどな。ワシはこのゲロをかわしたで！　しかし、ワシのタクシーのボディーはゲロまみれや。

「何しまんねん！」

とワシは河童に詰め寄った。すると、運転手がかしこまって降りてきて、

「某国の大富豪、クリゴーネ三世のご子息がタクシーという乗り物に乗りたいと所望されております。御引率願います」

と、深々と頭を下げよった。

ワシは何やようわからんけど、「儲かる」という文字が脳裏を三週したんや。

早速、タクシーに乗ったクリゴーネ三世のご子息といわれる河童は、どういう訳か行き先も言わずに後部席でダンマリや。そして、やっぱり指で前を指すだけなんや。ワシは〝このオッサン、日本語がわからんのやな〟と、思ったがその考えは甘かった。

なんと、オッサンの口の中にはゲロ第二段が仕込まれていたんや。ワシが、

「ねえ、どちらまで…」

と、再確認しに振り向いた瞬間、二発目のゲロッパが飛んできよった。ワシは、再び間一髪で避けたが、今度はハンドルがゲロだらけや。おまけに車内は、生臭いニオイが充満しとる。流石にワシは怒ったで。

「お客さん…」

そう言って運転席から降りようとすると、オッサンが初めて口をききよった。

オッサンの正体は某国の大富豪!?ワシの下心は頭をもたげたが……!?

「ヘイ、ボーイ。バレンタインデーに貰った大好物のティラミス味のチョコレートを食べ過ぎて気分が悪かったんだよ。かといって路上で吐くのは酔っ払いみたいだし、自分のマイカーで吐くと汚いからね。だからキミを選んだよ」

そう言って窓を開けてリムジンの運転手に合図を送り、何やら大きなダンボール箱を持ってこさせた。そして運び込まれたダンボール箱を指さし、

「これは僕がファンから頂いたチョコレート400個だ。全てキミにあげよう。それから、このままスタンドにいってくれたまえ。胃もスッキリしたし洗車料金、クリーニング代金、そして一日の売り上げ損害金を渡そう」

と、言いながら今度は名刺をワシに差し出しよった。ワシは〝悪い話やないやんけ〟。今時、売り上げもあがらへん。保障してもろうたら、エエ儲けや〟と、嬉し笑いを堪えながら、名刺をよく見ずに胸ポケットへしまいこんだ。

そして運転席のゲロを簡単にふき取ると強烈な残り香に耐えながらスタンドに突っ込んだんや。

「クリゴーネ三世のご子息。スタンドに着きました」

とワシが言うと、オッサンは後部席から立とうとせずに、「このまま洗車機に突っ込んでくれ。車内から洗車中の光景を味わってみたい。車内清掃はその後、店員に任せよう」

そう言ってワシを巻き添えにして自動洗車機に突っ込んだんや。ところがオッサンは洗車機の大きなブラシが横を通過する寸前に飛び出して逃げよった。ワシは追っかけようとしたんやけれど、洗車機のブラシが運転席の横でクルクル回っていて降りれん。オッサンはもたついているワシを尻目に後を付いてきたリムジンに飛び乗り、サッサと行ってしもうたんや。

残されたワシは、会社で散々絞られて、掃除までさせられたんや。不貞腐れたワシはオッサンが置いていったチョコレート400個を自宅に持ち帰り、唯一の報酬とばかり、思いっ切りかぶり付いて、再びワシは激怒した。

「か…軽石やんけ」

それはチョコレートの形をした軽石だった。ワシは歯が折れそうになったで。そして歯をかばいながら、もう一度オッサンの名刺をもう一度よーく見たら、何と、

「㈱軽石　栗粉根軽石」

会社名までカルイシやんけ。後日、新聞で詐欺事件の記事を読んだ時、このオッサンの顔写真が載っているのをワシは見逃さんかった。

ただ紙面では、コイツが使ってた偽名はワシに使ったのとは違こうとった。

その名もカール、スモーキー、石田。略して（カルイシ）。

オッサンはたぶん米米クラブのファンだったやろ。

KAZUKIプロフィール

ゴッドプロデューサーとして様々なメデイアに登場中の謎の大阪人。市井の様々な人間を観察するかたわら、特殊な能力を使った歴史小説も展開。昭和評論家でもある。著書に『平将門首塚の謎』（ジーオー企画）等がある。

構成／清上英範

2007年2月号

異色のドライバー KAZUKIの

大阪 お笑いタクシー「乗務報告」

第2話◎除夜の鐘?

"年末年始"

オッス。大阪にある㈱BTHタクシーの新人運転手「カズ」や。よろしゅう頼むワ。

その日は大晦日。ワシは仕事を早う切り上げて、自宅で除夜の鐘を聞きたいな、と叶わぬ夢を抱きながら車を走らせとったんや。

丁度、大阪日本橋辺りの電器屋街を走っていた時や。そうやな、時間は夜の10時過ぎや。大きなリュックサックを担いだ小太りで白のランニングシャツに短パン姿のオッサンが、風呂敷持って道路沿いの照明看板の下で手を振ってるんや。

ワシは少し嫌な予感がしたんや。何故って、そのオッサン、超季節はずれの格好に加え、超大きな麦わら帽子にサンダル履きや。どない思う?この寒空やで。どう見ても変質者やろ。しかし、そこは仕事や。ワシは直ぐさまオッサンの前に車を止めたんや。そして、

「まいど! どちらまで行かせてもらいまひょう?」

と、百点満点の笑顔でオッサンを車内に迎えたんや。ところがオッサンは、

「ココや、ココ」

ちゅうて画用紙にクレヨンで書いた地図を無造作に見せよった。そして、

「はよ行って」

と急かすんや。ワシは子供が書いた"あみだくじ"みたいな地図を観ると、四角いビルらしきマークの横に赤で"観覧車"の絵が書いてあるのをみつけ、

「ああ、大阪梅田にあるヘップファイブの真っ赤な観覧車(注①)ですな。確か、これからそこで年末のカウントダウンがあるらしいでっせ。急いで行きますわ」

と、機嫌ように車を発車させたんや。ところが現地で、

「着きましたで」

とオッサンに声をかけるとオッサンは無表情で観覧車マークに罰点をつけて、その横に塔を書きよった。そして再び、

「やっぱココや。行って」

と、ぬかしよる。

「お客さん。これって通天閣でっか? 通天閣やったらさっきの日本橋から歩いて数分の所でっせ…」

ワシは少しムッとして言うと、逆ギレして、

「ワシはココに行きたいんじゃ! ココじゃココじゃ! ガルルルル」

と唸りよる。ワシは、

「この裸の大将みたいなオッサン、何考えてんねん…、イッペン、シバイタロか…」

と思いながら車をUターンさせたんや。

ようやく通天閣に着くと裸の大将は、グーグーいびきをかいて寝とる。

つい1分前まで大騒ぎしとったオッサンが、着いた途端にあきらかなほどわかりやすい狸寝入りや。

「まさか、こいつ無銭乗車かいな…それともココを今日の宿にするつもりとちゃうか」

そう思ったらワシはついつい条件反射で戦闘態勢をとりかけたんや。しかし、

(まあ、待て待てカズよ。おまえかって、カネを忘れたり、うっかりっちゅう事もあるやろ。ひとまず、起こして事情を聞いてみんと)

ワシはそう自分に言い聞かせたで。おまけに我が社は関西で㈱BTHは無愛想、低マナー、下手クソと、噂されて名高い会社や。

ワシは作り笑いを浮かべ「どうさして頂いたらよろしいでっしゃろ」

と、寝たふりのオッサンにもみ手を始めたんや。その時や。車内が急に明るくなったんや。そして運転席の窓ガラスをマイクを持った男がノックしよった。ワシは仰天したで。おまけにその男は、肩にカメラを担いでる男と撮影用照明を持った男を従えているんや。ワシは慌ててパワーウインドウの窓を開けたで。

「すみません。ある番組の企画で"無賃乗車です。運転手さん、ゴメンナサイ"っちゅうコーナーですねん」

そういうて男達はカメラを向けよった。そして変なオッサンは落語家の売れないお笑い芸人の変装姿やと明かしたんや。ワシは一瞬、狐につままれたような気分になったで。そんで精一杯カメラに愛想笑いをしたんや。

その後、そのVTRがどこで放映されたかワシはしるよしもない。

ねえ運転手さん。ものは相談やけど"抜かしたる"さかいにタダにせえへんか?

それから間もなくして、今度は飛田新地の近所でベッピンサンの20歳前後の姉ちゃんを乗せたんや。何でも天王寺の自宅マンションまで行ってほしいそうや。ワシは、

(場所が場所や。おまけにこの化粧。絶対に飛田新地のエエ事させてくれる姉ちゃんに間違いない)

と、内心ほくそ笑んだんや。当然、運転手と客や。別に何があるわけでもないけど、男は常に妄想を楽しむ不思議な生き物や。ワシは思わず目じりが下がったで。そしてメー

注①

HEP FIVE観覧車【大阪・梅田】

梅田でひと際目立つ真っ赤な観覧車も営業時間を延長。夜空に浮かび上がる大阪城なども見え、2人だけのロマンチックなカウントダウンを過ごせる。ゴンドラ内は冷暖房完備で寒くても安心。

KAZUKIプロフィール

ゴッドプロデューサーとして様々なメデイアに登場中の謎の大阪人。市井の様々な人間を観察するかたわら、特殊な能力を使った歴史小説も展開。昭和評論家でもある。著書に『平将門首塚の謎』(ジーオー企画)等がある。

構成/溝上英範

2007年1月号

異色のドライバー

KAZUKIの大阪お笑いタクシー「乗務報告」

こんなケッタイな人がいてまんねん

第1話◎北新地のママ

ワシや。カズちゃんやで。

今まで「百鬼夜行」から始まり「徒然日記」「おセックスの夜明け」等をやって来たけど、編集長が新企画と称し、いきなりワシをタクシーの乗務員にしよったんや。

ホンマにタマラン出版社やで。もっとも、ワシを採用したタクシー会社も災難やけどな……。

さて、ワシが勤務する事になった会社は大阪にある㈱BTHちゅうタクシー会社や。

会社名のBTHは『ビューティフル、トラベル、ハイヤー』っちゅう美しい言葉の略やそうや。せやけど、ココ大阪の人の間では「無愛想、低マナー、下手クソ」の略と言われてるそうや。御陰でウチの会社は毎年大赤字なんや。そこで使命感の強いワシはイメージ回復の為に日夜「愛想、安全、あなた次第」の「3A運動」を心掛け、名誉挽回に励む事に決めたんや!

さて、勤務して2日目の事や。ワシは大阪北新地の外れでクラブのママさんらしい女性を乗せたんや。

その女姓は50歳位でスラッとした着物姿の清楚な感じのベッピンさんやったで。もっとも、仕事柄やろうけど少し化粧と香水は濃いけどな。ところがこのママさん、少し酔うとるんや。

「何処まで行かせてもらいましょうか?」

とのワシの問いかけに、

「絶頂までイカせて欲しいワン」

「ちゅう、訳のわからん事を言うたかと思うと、今度は運転席にしなだれかかり、

「ねえ、ねえ、ウチのバトラーが出ていってホントに清々したの。今度はあなたを飼ってあげようかしら」

と、ワシの左耳を引っ張りよるんや。ワシは、

「バトラーっちゅうのは犬ちゃんでっか? 猫ちゃんでっか?」

と、痛いのを我慢しながら聞くと、

「あなた『風邪と共に去りぬ』っていう映画を知らないの? バトラーはヒロイン、スカーレット・オハラの相手役の御名前よ」

と、大変な丁寧語で話しよる。ワシは行き先がワカランので、車を停車させてママの話に嫌々つき合ったんや。

「ねえ、聞いてくださる? バトラーったら結婚前は〝僕は元レーサーでサーキットを荒らしまくったんだ。でも今は小説家だ〟ってウソをついていたのよ。

私はオカシイと思ったわ。だって、プロポーズの言葉が〝僕に君のパンツを脱がさせて下さい〟だったんだもの。小説家のジョークにしては下手よねえ。

結局、ただの無職のおじさんだってわかったのは入籍してからなの。私って何時も騙されてばかりだわ。ああ、悲しい……」

後部座席にふんぞり返り、大股を広げてオッサン言葉でまくし立てるママさんの大迫力!

そう言うと今度は後部座席にうつ伏せになって泣き出しよった。ワシはエライ客に当たってしもうた、と悪運を呪ったで。そして辛抱出来ず、

「自宅は何処でっか? 辛そうやし…、早く帰ったほうがよろしいで。送りまっせ」

と再度行き先を聞いたんや。すると、ママはガバッと起きあがり、

「あなたって優しいのね。でも、あなたもバトラーみたいに私を騙すんじゃないの。もうこれ以上騙されるのはイヤイヤイヤイヤ」

っちゅうて抱きついてきよった。ワシは、

(このボケ。送るのはワシの仕事じゃ)

と思いながらも3A運動の標語を思い出し、

「大丈夫です。早く御自宅をおっしゃって下さい。安全にお送りしますから…」

とママに合わせて慣れん標準語で応対したんや。

すると、ママは後部座席にふんぞり返り大股を広げて、

「それや! いつも男は馬鹿丁寧な言葉使うて私を騙すんや。バトラーのボケは〝君の姓になっても良いかい? 僕は名字を捨てるよ〟っちゅうて私の姓を名乗った瞬間、借金に走りよった。

多重債務で自分ではカネが借りられへんかったんやけど、名前が変わったおかげで新規で借りられたそうや。

おまけに毎日毎日寝る瞬間までネクタイ姿や。理由を聞いたら〝僕は関西の中条きよしって言われるんだ〟ってぬかしよる。中条きよしに似てるところはお前の人生がヒット曲の『うそ』『理由(わけ)』『うすなさけ』っちゅう事だけや。このアホンダラ」

と、急にオッサン言葉に変身や。ワシはド肝抜かれたで。おまけに興奮したせいか、

「アー、気分悪いで! おまえがバトラーの事を思い出させるからやで。ああ、吐きそうや吐きそうや……。吐いたろうか?」

っちゅうて、エズキ始めよった。車内でゲロを吐かれたらワシの一日は終わりや。

「ちょっとちょっと…」

と、ワシは慌てて運転席を飛び出し後部席のドアを開けたんや。そしてママを車外へ誘導しようとしたんや。ところがその瞬間…、

「あーあ、オモロかった。エエ暇つぶしになったワ。そろそろ彼氏と待ち合わせの時間やし、行くとするか」

と、シャキシャキと車外へ出て背伸びしよったんや。そして、

「兄ちゃん、お前んとこの会社なあ、いつも車を道端に止めて客待ちするんはエエけど、邪魔なんや。

これに懲りたら〝大阪名物、客待ち駐車〟を控えんかい。このアホンダラのBTHタクシー」

っちゅうて、サッサと大股で歩いて行きよった。ワシは呆気にとられてしばらく呆然と立ち尽くしたで。

――関西の運転手さん。ホンマに毎日お疲れ様やのう。ワシ…しみじみ…思うで。

KAZUKIプロフィール

ゴッドプロデューサーとして様々なメデイアに登場中の謎の大阪人。市井の様々な人間を観察するかたわら、特殊な能力を使った歴史小説も展開。昭和評論家でもある。著書に『平将門首塚の謎』(ジーオー企画)等がある。

構成/溝上英範